ヴィゴツキーを超えて？

ウエルチ『心の声：心的行為への社会－文化的アプローチ[1]』を読む

教育心理学教室　　高　取　憲　一　郎

1　はじめに

わたしはこれまでしばしば，世界のヴィゴツキー研究者のなかの二人の有力な心理学者であるところの，オランダのファン・デル・ヴェールとアメリカのウエルチの仕事に注目してきた。先日，ウエルチからその最新の著書『心の声：心的行為への社会－文化的アプローチ』の原稿がわたしの手元に送られてきたので，これを機会に彼とわたしのあいだに横たわる一つの共通の問題について検討を加えてみることにする。その問題とは，ヴィゴツキー理論によって社会における個人の問題はどこまで解けるか，換言すれば，ヴィゴツキー理論はそのパースペクティブのなかに，彼の学派が冠せられているとおりに，人間の行動と心理の文化－歴史的（社会的も含む）解明を可能にする分析枠組みを備えているかいなかということである。

わたしは，近著，『ヨーロッパ心理学との対話――ブタペストで考えたこと』（京都・法政出版1990年）のなかで，以上のような論点におけるヴィゴツキーの不十分性について触れ，それを乗り超える一つの視点として，ハンガリー科学アカデミー心理学研究所のパタキおよびエルシュの歴史心理学，さらにフランス・ストラスブール大学のプラデルの歴史民俗学的心理学研究を提出しておいた。一方，ウエルチは，わたしと同様の試みのなかで，すなわちヴィゴツキーを乗り超えるという試みのなかで，かねてより，ヴィゴツキーの同時代人バフチンの理論に依拠すべきことを主張している。

ウェルチがはじめてこのような論点を打ち出したのは，1984年の論文「行為理論における分析の多層性[2]」においてである。そのなかで彼は，まだ素描的な段階であるとことわりながらも，次のような議論を展開する。まず，行為を分析する際の分析水準を三段階に設定する。すなわち，①個人的水準，②微社会学的水準，③巨社会学的水準，である。従来の心理学研究においては，①の水準の分析はピアジェに典型的に見られるのだが，人間とものとの相互作用の分析を特徴としている。②の水準の研究は，ボールドウィンやミードを継承したコールバーグやセルマンに見られ，そこでは人間とものとの相互作用ばかりではなく，人間と人間との相互作用の分析に重心を置いている。③の水準は，たとえば人間疎外の問題というような社会的規模の大問題を含むのだが，このような問題には心理学者は関与してこなかった。これらの問題は，マルクスやルカーチらにより弁証法的・史的唯物論の立場から分析されてきた。ただ，心理学者のなかでは，ヴィゴツキーのみが人間心理の発達を究極的に支配しているのはこれらの原理であることに言及しているのみであった。そしてウエルチは，上の三つの水準を統合的にとらえることを可能にする単位は，言語的コミュニケーシ

ョンであり，バフチンのコミュニケーション理論に依拠してヴィゴツキー理論を発展させることによってのみ，ヴィゴツキーのいうところの心の文化－歴史的理論は完成されると考える。

さらに彼は，その後，1985年の論文「精神生活の記号論的媒介：ヴィゴツキーとバフチン[3]」のなかでバフチンへの検討を本格的に開始する。しかし，そこではまだ，以下のようなことが指摘されているのが目につく程度で，満足のいく論及というには不満を残す。すなわち，まず，ウエルチは，一般によく言われているように，ヴィゴツキーとバフチンの共通点（対話の重視，内言をめぐる見解の一致，意識への社会記号論的アプローチ，スターリンによる抑圧など）を確認したうえで，両者の差異を次の点に求める。ヴィゴツキーの研究は，心理学的メカニズムの水準に重点を置いたものであり，バフチンの研究は社会－文化的水準に重点を置いたものである，と。そして，ヴィゴツキーの理論は，バフチンの内言の理論およびイデオロギー論により補強されることによって，発展させられねばならない，と。

さて，本稿は，以上述べてきたような議論のレベルから出発する。ウエルチは，バフチン理論をいかに用いてヴィゴツキー理論を補強し，発展させようとしているか。そして，バフチン理論に依拠して，どのようにヴィゴツキーを乗り超えようとしているか。

2　ウエルチ『心の声：心的行為への社会－文化的アプローチ』の検討

まず，ウエルチは序章で，これまでの心理学が現実の問題，あるいは社会的な大問題へアプローチできなかった理由は，人間の心的機能があたかも文化的，社会制度的（institutional），歴史的な空虚（vacum）のなかで営まれているとみなしているからである，とする。すなわち，まず初めに個人の分析があり，その後で，せいぜい付け足し程度に上の三つの要因（文化的，社会制度的，歴史的）が二次的なものとして考えられているにすぎない。個人を，社会－文化的状況より前に分析するのではなくて，まずもって個人を超えて個人の外側へ出なくてはならない。このようなアプローチは，従来の心理学のなかでは，唯一，ヴィゴツキー・レオンチェフ・ルリヤ学派のみがとってきた。

以上のウエルチの問題意識は，次のようなヴィゴツキーおよびルリヤの見解を言い換えたものに他ならない。すなわち，ヴィゴツキーによれば，「高次心理機能の源は，魂の深部とか神経組織の隠された特性のなかに見いだされるべきではない。そうではなくて，個人という有機体の外部に，個人とは独立に客観的に存在する社会的歴史のなかに見いだされるべきである[4]」。これに付け加えて，ヴィゴツキーの有名な命題，「心を発見するには，心を棚上げしなければならない[5]」もあわせ紹介しておこう。またルリヤはその神経心理学的研究をふまえて次のように言う。外的補助物（外的刺激）を用いての大脳皮質外組織化による機能系の形成という原理に依拠することによって，「心理学は初期の偏狭な自然主義的限界を超えて，自然現象の社会的形成の科学へとなった[6]」し，「社会的実践の基本形式ならびに社会の史的発達の基本段階に緊密に依存している心理過程の構造についての科学となる[7]」のである。

これまでのところで明らかなように，ウエルチは，大枠においてはヴィゴツキーの立場を，当然ではあるが肯定的に評価する。しかし，ヴィゴツキーにはいまひとつなにかが足りないと言う。つまり，ヴィゴツキーがおこなったのは大人と子供の間に取りおこなわれるような，個人と個人の間の関係の記号論的分析であった。ヴィゴツキーの場合は，個人の心理機能の基底にある社会的過程の分析が不十分なゆえに，階級闘争とか疎外，商品崇拝などのような大規模な歴史的，社会制度的，

文化的プロセスへの言及がまったく見られない。すなわち，ヴィゴツキーは，真の意味での，心に対する社会－文化的アプローチを提出することには成功しなかった。したがって，ヴィゴツキーがおこなったように，研究の視野を単に心理間機能の次元にとどめないで，より広範囲の歴史的，経済的水準にまで広げることが必要である。そのためには，バフチンの発話(utterance)，声(voice)，社会的言語 (social language)，対話 (dialogue) という概念を用いて，ヴィゴツキー理論を発展させることが求められている。(以上のウエルチの議論は，1章，2章，3章よりまとめた。)

ここで，ウエルチも言及しているヴィゴツキーの心理間機能から心理内機能への内面化という思想，および，他の箇所でウエルチがきわめて重視している媒介という概念に，ひとまずウエルチを離れて触れておこう。この両者は，ヴィゴツキーにおいては，個人と社会を結びつける重要な鍵概念になっているからである。

まず，心理間機能から心理内機能への内面化について，ヴィゴツキーの指示身振りの発達についての説明，ルリヤの随意的注意の発達に関する説明，およびヴィゴツキーの最近接発達領域に関する説明を例に検討してみよう。

ヴィゴツキーは『精神発達の理論』のなかで，指示身振りを例にしながら高次精神機能の社会的発生について論じている[8]。彼によれば，指示身振りの発達には三段階ある。第一段階は，子供はなにかを把握しようとして手を空中に差し出すが失敗する。第二段階は，第一段階の状況へ母親が介入してくる水準である。つまり，子供の差し出された手の意味は母親により解釈され，母親の援助によって子供は把握しようとしていたものを自分の手に握らされる。すなわち，母親は子供の手の運動をなんらかの対象物に対する指示として意味づけたのであり，ここにおいて，母親という他人により初めて意味がもちこまれたのである。第三段階は，それまでは意味を付与する母親と，自分の指示身振りに母親により意味を付与される子供というかたちで，二人の人間の間に分かちもたれていた指示身振りという機能（心理間機能としての指示身振り）が，あたかもひとりの子供のなかに母親と子供が同居しているかのごとくに内面化される(心理内機能としての指示身振り)。すなわち，子供は自分の身振りの意味を理解し，子供自身が自分の身振りを指示として取り扱い始める段階である。

次に，ルリヤの記述をみよう。ルリヤは『ルリヤ現代の心理学（下)』のなかで随意的注意の発達を以下のように論じている[9]。第一段階は，母親が子供に「これ茶碗よ」と言いながら茶碗を指差し，子供が茶碗を見て茶碗のほうへ手をのばす。この段階の注意はまだ母親から促されたものであり，子供はそれに従っているだけである。つまり，この段階では，注意は命令する母親と命令に従う子供という二人の人間の間に分かちもたれた機能，すなわち心理間機能として存在している。要するに，まだ自分の意志では統御できない不随意的注意である。第二段階は，子供が，「これ茶碗だよ」と自分自身で言いながら，茶碗に手を伸ばしつかむ段階である。すなわち，自分で自分の注意を統御できるようになり，随意的注意が成立したわけである。この段階では，子供の内側に，ことばで指示する母親とそれに応えて行動する子供の両方が同居しているかのような，新しい形の内的な構造，すなわち心理内機能としての注意の構造ができあがったのである。さらに，ルリヤは第三段階，第四段階を付け加えているが，そこでは子供の言語的，知的構造が高度化，複雑化するにつれて注意の機能もあたかも不随意的におこなわれるかのごとくに，きわめて高度化されることを指摘している。

ところで，以上見てきた二つの例は，ヴィゴツキーの最近接発達領域という概念ともまったく同一の構造をもっている。ヴィゴツキーによれば，最近接発達領域とは「子供が独力でおこなう問題

解決の水準（現実的発達水準）と，大人の援助や助言のもとで，あるいは自分より能力のある友達の協力のもとでおこなわれる問題解決の水準（可能性としての発達水準）の間の隔たり[10]」である。そして，ウエルチは，この現実的発達水準と可能性としての発達水準の間に四つの段階を区分している。第一段階は，子供は大人の助言や指導がよく理解できないで，両者の言い分がかみあわない段階。第二段階は，大人の助言や指導に完全にはまだ子供が乗りきれない段階。第三段階は，基本的にはまだ大人の指導下にありながらも，子供は自分の力で思考できはじめる段階。第四段階は，子供は完全に自分の力のみで思考し，問題解決ができるようになった段階である[11]。この最近接発達領域の問題では，初めは外部にあった大人の助言とか指導とかが，子供の内部へととりこまれ，心理内機能へと転化していったということが重要である。またそれは，別の見方をすれば，大人のもっている科学的概念が，大人と子供の相互交渉の結果として子供の内部へととりこまれ，子供がそれまでにもっていた生活的概念に変形を加え高めていった過程とも考えられる。

以上の三例を通じての共通点は，最初は外部に存在し，しかも大人から与えられたものである意味とか概念とかことば（要するにヴィゴツキーのいうところの記号）が子供の内部へととりこまれ，子供の行動や心理過程を統御するようになったという点である。ヴィゴツキーの表現を用いれば，「記号は，つねに最初は社会的結合の手段であり，他人への働きかけの手段であって，その後でのみ自分自身への働きかけの手段となる[12]」というわけである。だから，ヴィゴツキーの言う心理間機能から心理内機能への内面化により子供の内部へととりこまれるものは，記号にほかならない。これが，社会と個人の問題を考える際のヴィゴツキーの中核となる思想である。

ところで，この場合の記号は，ヴィゴツキーが外的補助刺激とか外的補助物とかと呼んでいるものと同じものを指しているのだが，言語および道具のことだといってもまず間違いないと思われる。そうすると，それは行動の媒介性というヴィゴツキーの見解とオーバーラップする。周知のように，ヴィゴツキーは，人間と環境（物理的および人的環境の両方を含む）の間に道具と言語を媒介させることが，人間の行動の文化的で高次の形態を保証するとしたわけであるが，人間はこの外部の記号である道具と言語をとりこむことによって，自分自身を形成する。もちろんその場合に，大人（ヴァルシナーのことばを借りると社会的他者[13]）の援助を介してではあるけれども。したがって，ウエルチも指摘するように，媒介という概念は，心への社会的－文化的アプローチのもっとも基本的な構成要因であり，媒介とは，道具と言語が人間の行為のなかに編み込まれ，そして道具と言語が人間の行為を形成するプロセスである。

ここで注意を喚起しておきたいのは，ヴィゴツキーのイメージのなかにある社会というのは，道具と言語を含む記号および社会的他者から構成されるものである。このことは，ウエルチがすでに指摘しているヴィゴツキー理論の不十分性の問題へとつながっていく。

さて，再びウエルチの議論にもどろう。ウエルチは第三章で，ヴィゴツキーを乗り超えるために必要となるバフチンの主要な鍵概念を検討している。それらは，発話（utterance），声（voice），対話性原理（dialogicality），社会的言語（social language）あるいは言語行為のジャンル（speech genres）である。

まず，発話，声，対話性原理の三つは不可分の一体となった関係にあるので，まとめて検討することにしよう。

発話は，行為としての言語コミュニケーション（speech communication）の単位であり，それは，言語（language）の単位としての文（sentence）とは明らかに区別されるものである。なぜバフチンが発話を重視したかというと，発話というのは，誰が，誰に向かって話しているのかということ

が重要なので，そこには話し手である主体が存在しなくてはならない。つまり，バフチンの立場は，主体の存在しない言語の分析ではなく，主体の存在する言語行為あるいは言語活動の分析をしなくてはならないという立場である。したがって，分析の単位は言語の分析単位である語(words)や文ではなく，言語行為の分析単位である発話になるのである。

次に，声であるが，声とは，話し手あるいは話す人格（speeking personality)，または話す意識（speeking consciousness)と定義されている。そして，発話は声によって，すなわち話す主体によって産出されるとされる。そのうえに注目すべき点は，発話はそれを産出する声，すなわち話す主体を反映しているばかりではなく，発話がそれに向って発せられるところのいくつかの声(voices)，すなわち自分以外の他の主体，あるいは聴き手をも反映しているという点である。この意味で，バフチンが，誰が，誰に向って話しているのかが重要であり，発話は言語コミュニケーションの一環であり，お互いに反映しあっており，一つの発話だけで自己完結しているのではないと指摘しているのである，とウエルチは述べている。

以上のところでは，発話というのが少なくとも二つの声（自己と他者）を反映しているということをみてきたわけだが，時間的な側面からみても発話は過去および未来をともに反映している。すなわち，発話は言語コミュニケーションの一つの環であることはすでに触れたが，それは必然的に，ある発話はその前の発話に反応し，続いて起こる次の発話を予知していることを意味している。さらに，そのような反応と予知は，現に今目に入る範囲の自己と他者との関係とか，一つの発話の直前，直後の発話とかというレベルを超えて，さらに広範囲の空間的，時間的な声，すなわち文化的・歴史的な声に反応し，それらを予知している。したがって，対話性原理というのは，このような大きなスケールにおいて捉えられねばならない，ということになる。

次に，社会的言語，あるいは言語行為のジャンルというものを検討してみよう。社会的言語というのは，ある時代におけるある社会システム内において，ある特定の社会階層(たとえば職業集団，年令集団）に特有の談話のことであり，社会的言語行為のタイプ（social speech types）あるいは言語行為のジャンルとほぼ同じものを指していると思われる。バフチンはこのような社会的言語の例として，方言とか専門用語，世代語，年令語，党や国家に特有の言語などをあげているようであるが，われわれは無意識のうちにある特定の社会的言語に則って，その社会的言語の枠組みのなかで話しているのである。むしろ，なんらかの社会的言語を使用しないで発話を生産するのが難しいぐらいであり，ある社会的言語の枠内で話すことによって，われわれの発話は安定した構造をもつといえるのである。ウエルチは，この社会的言語あるいは言語行為のジャンルという概念は，心への社会－文化的アプローチにとって非常に重要だと言っているわけだが，たしかにヴィゴツキーの段階では所属が不明であった人間が，社会的言語という概念を持ち込むことを通じて，ある特定の階層あるいは集団に属することにより，社会的下部構造との関係がはっきりさせられたと考えることもできる。

次は，腹話性という問題である。腹話性というのは，ventriloquismのわたしなりの訳語であるが，一つの声のなかに他者が住んでいるとか，あるいは，ある声は他の声を介して話すとかと説明されているものである。要するに，ある一人の人の発話は他の人の発話を含んでいる，あるいは自分の属する集団の社会的言語，言語行為のジャンルを含むというかたちで他者の声を含んでいるということである。その意味で，あらゆる発話は多声的（multivoicedness）であり，対話的であり，ポリフォニーである。この腹話性というのは，ヴィゴツキーの心理間機能の心理内機能への内面化という見解を社会的言語の平面上で展開したものであるのをみてとるのは容易であろう。

最後に，権威主義的談話と内的説得的ことばという問題をとりあげよう。

周知のように，ヴィゴツキーは，従来の心理学に伝統的であったところの，刺激－反応図式を批判して，彼独自の二重刺激法図式を提唱している。そこで問題になっている基本的な考え方は，人間は外部から人間に与えられる刺激にただ受動的，一方向的に反応するだけの存在ではない。そうではなくて，人間は外部から入ってくる刺激に対して働きかけ，加工して，新しい刺激（刺激－手段）を造り出し，次には，その刺激－手段を用いて，最初の刺激（刺激－対象）を新たな刺激－対象へと変化させ，そのように変化させられた全体的状況のなかで自らの行動を制御する。このヴィゴツキーの図式は，自然に対して働きかける人間という，人間の活動理論的モデルを刺激－反応図式へと適用し，修正したものといえよう。

さて，以上のヴィゴツキーの刺激－反応図式と二重刺激法図式の対立は，バフチンの権威主義的談話と内的説得的ことばの対立に照応する。バフチンによれば，権威主義的談話は，他の声との相互活性化を許さず，聴き手に対して無条件の忠誠を要求し，聴き手が自主的・創造的に考えることを禁ずる。それは，いわば静的で死んでいるかのような意味構造をもつ。バフチンによれば，そのような権威主義的テキストの例としては，宗教的テキスト，政治的テキスト，道徳的テキスト，父親とか大人とか教師のことばなどがあるという。一方，内的説得的なことば，あるいは内的説得的な談話は，話し手のメッセージを受容する過程で，聴き手はそのメッセージに働きかけ，分析・総合し再構成する。すなわち，内的説得的なことばは，話し手と聴き手の対話の産物であり，その半分は話し手のもの，残りの半分は聴き手のものである。そこでは，権威主義的談話と異なって，他の声との間の相互活性化が可能となり，自主的・創造的な新たなことばの覚醒が生じ，外に向って開かれた，しかも他者との連帯のなかにある力動的で無限に発展する意味構造が出現する。そして，このような内的説得的なことばは，異思考混淆あるいは認識の多元主義を保証するものである。

ところで，上に述べた権威主義的談話と内的説得的なことばの対立するイメージのなかに，崩壊しつつあるソビエト型・スターリン型社会主義および共産党一党独裁型国家とそれに対抗する民主フォーラム，あるいは市民フォーラムのイメージを重ねあわせて読むことは容易であろう。

以上のように，ヴィゴツキーを乗り超えるためにウエルチが用意したいくつかのバフチンによる概念装置を検討してきた。そこで次に，ウエルチがそれらを用いて，現実の社会問題を分析している例をみてみよう。

ウエルチは，現在のアメリカ大統領ジョージ・ブッシュの1988年のアメリカ共和党の大統領候補者指名受諾演説を分析している。ウエルチが分析の対象としたのは，その中の次の一節である。

「われわれは，過去5年間に，1700万もの新たな働き口を造り出した。それは，ヨーロッパと日本を合わせた数の二倍以上もの膨大な数の働き口である。しかも，それらの働き口はいずれも満足のいく仕事ばかりだ。過去6年の間に造り出された働き口の大部分のものの平均年収は，2万2千ドル以上である。誰か，『マイケルにメッセージ』を伝えてやったほうがいい。彼に，われわれは，良い賃金のもらえる良い仕事を造り出したんだと言ってやったほうがいい。実際のところ，彼らはおしゃべりだ。だが，われわれはやったんだ。彼らは約束する，だが，われわれは実行するんだ」（ニューヨーク・タイムズ，1988年9月19日付）

この一節を，ウエルチはバフチンに依拠しながら，以下のように分析していく。

まず，誰がこの演説をしているのか。もちろん，単純な表面的な答えはジョージ・ブッシュである。しかし，少し考えてみれば，これらの発話のなかには他者の声が含まれていることがわかる。まず第一に，この演説には政治的言語行為のジャンルに特有の構造が含まれている。たとえば，「実

際のところ，彼らはおしゃべりだ。だが，われわれはやったんだ。彼らは約束する，だが，われわれは実行するんだ」などが，それに当たるであろう。第二に，現在の大統領選挙キャンペーンの演説用原稿は，候補者および一ないし二名のスピーチ・ライターの合作である。そして，複数のライターによって書かれた第一次原稿は，次に別のライターおよび候補者自身によってさらに推敲されてようやく聴衆の前にだされるのである。すなわち，聴衆はその演説のなかに，声のポリフォニーを聴くことができるのである。

さらに，このブッシュの演説のなかには対話性原理も含まれている。まず第一に，ユニークな声と声との間の対話的な出会いである。すなわち，ブッシュと民主党大統領候補のマイケル・デュカキスの声である。そして，その対話的出会いは，パロディーになっている。たとえば，ブッシュの演説のなかの一節「彼に，われわれは，良い賃金のもらえる良い仕事を造り出したんだと言ってやったほうがいい」は，その例である。というのは，1988年のキャンペーンで，マイケル・デュカキスは，「良い賃金の良い仕事」を造り出す必要性を常に主張していた。このデュカキスの主張は，民主党の次のような見解に支えられていた。すなわち，たしかにレーガン大統領時代に新しい仕事が造り出されたが，それらの多くは臨時的で，低賃金で，付加給付を欠いたものであった。このようなデュカキスの批判に対するブッシュと彼のスピーチ・ライターたちの反撃のための戦略は，デュカキスのことばに公然と反対するのではなくて，デュカキスのことばを借用することであった。すなわち，彼らは，ブッシュの声とデュカキスの声が同時に存在するということ（腹話性）から生ずるパロディー効果をねらったのである。

第二の対話性原理は，聴衆がブッシュの演説を理解するプロセスは，ブッシュの発話と彼の演説を聴いている聴衆の側の発話（明示的であれ暗示的であれ）との間の対話的出会いを含むということである。当時の，共和党大会会場には，約3000人の聴衆がいたが，その3000の声がブッシュの発話との間にそれぞれ相互交渉をおこなうことにより，ブッシュの発話は3000通りもの異なる解釈をされていたのである。

第三の対話性原理は，「誰か，『マイケルにメッセージ』を伝えてやったほうがいい」というフレーズに関わってのものである。この『マイケルにメッセージ』という部分は，1966年にディオンヌ・ウォーイックが歌ったポップ・ミュージック・ソング『マイケルにメッセージを』から直接とられたものである。ブッシュはこのフレーズを，副大統領候補に若きダンフォース・クエールを選んだこととあわせて，青年層にアピールするために借用したのだ。そこには，次のような対話性原理がみられる。まず第一に，1960年代のポップ・ミュージックという言語行為のジャンルのことばと，ある一人のポップ歌手の歌を借用することによって，ブッシュはそのなかで複数の声が話している一つの発話を造り出した。第二に，ブッシュの発話と出会う聴衆の側にも，ポップ・ミュージックという言語行為のジャンルによって形づくられた腹話性が生ずる。しかし，この対話的な出会いは聴衆の世代によって，すなわち聴衆のもつ社会的言語のレパートリーによってさまざまに異なる。古い世代は，民主党の候補者に対する攻撃のみを聴いたかもしれないし，若い世代はそれとは別のもの，すなわち自分たちに対するブッシュからの連帯のアピールをそのなかに聴いたかもしれない。

以上のように，記号論的現象に対するバフチン的アプローチは，発話と発話の意味は社会－文化的文脈のなかに本来的に位置づいていることを強調している。そして，ある発話を産出するということは，少なくとも一つの社会的言語を借用しているがゆえに，そしてまた，その社会的言語は社会－文化的に位置づけられているがゆえに，意味は歴史的，文化的，社会制度的状況と複雑に結びついているのである，とウエルチは述べている。

さて，ウエルチは，最終章（第6章）において，心への社会－文化的アプローチにおける「媒介された行為」(mediated action) と「媒介的手段とともに行為する人間」(persons-acting-with-mediational-means) という二つの鍵概念の重要性を強調している。ここでのポイントは，人間は常に媒介的手段とともに，すなわち道具および言語とともに行為するということであろう。人間の行為は，道具や言語と切り離されたかたちでは決して考えることができない。つまり，「媒介された行為」は，それ以上分解できない単位であるし，「媒介的手段とともに行為する人間」は，それ以上分解できない行為者 (agent) である。そしてウエルチは，この点において，媒介的手段から切り離された行為のみに依拠するレオンチェフは，ヴィゴツキーやバフチンの立場に反しているし，ヴィゴツキーの強調した記号論的媒介という視点を見失っている，と言うのである。

さらに，これまで，西欧の科学や民族理論は，原子論的人間観と自由な，束縛の無い自己というイメージに囚われすぎているあまりに，孤立して行為する個人であるとか，あるいは，個人が行為する際に用いる媒介的手段を二次的で補助的なものとみなしがちであった，と指摘している。

以上，ウエルチの『心の声：心的行為への社会－文化的アプローチ』をわたしなりの視点で読んできた。ここで，ウエルチの見解を，わたしが理解した範囲で簡単にまとめてみると，次のようになるのではなかろうか。

ウエルチによれば，人間は道具および言語とともに，あるいは道具および言語に媒介されて行為するものである。当然，ここには，人間と自然との関係（道具に媒介された行為，すなわち労働）および人間と人間との関係（言語に媒介された行為，すなわちコミュニケーション）の二つが想定されていると考えることができる。そして，道具および言語と不可分一体のものとして人間をとらえることにより，人間を社会と文化のなかでとらえることができる。というのは，社会と文化を構成しているのは，道具であり言語であるからである。ウエルチの言う「媒介された」ということの真意は，人間と道具および言語は切り離すことができないということと同義である。さらに，この切り離すことのできないということは，道具と言語が人間の内部へと取り込まれ，内面化されているということを含んでいるものと思われる。道具と言語を取り込むことによって，社会と文化を取り込む。すなわち，道具と言語に媒介されることによって，人間と社会が，個人と社会が連結される。

しかし，このような見解であれば，それはすでにヴィゴツキーが述べているわけで，ことさらバフチンを持ちだすまでもないであろう。バフチン理論を援用してヴィゴツキーを発展させるとする一番の眼目は，わたしの解釈では，社会的言語あるいは言語行為のジャンルという枠組みを持ち込んだところにあるのではなかろうか。すべての個人は，それぞれの属する社会的言語あるいは言語行為のジャンルの中で行為することによって，その属する集団の一員として社会化される。そのために，階級とか階層とかを刻印された個人を問題にすることができるようになるのである。ウエルチが，バフチン理論の中から，心への社会－文化的アプローチをおこなうための鍵概念として析出した「発話」，「声」，「対話」などというものは，すべてこの社会的言語あるいは言語行為のジャンルの枠組みの中で営まれているものである。ウエルチが，ブッシュの大統領候補者指名受諾演説を分析している例をみても明らかなように，あの一節の演説の中にもさまざまな社会的利害を反映したさまざまな声が，互いに対話を試みているのである。

ところで，ウエルチは，「媒介された行為」をそれ以上分解できない単位とし，「媒介的手段とともに行為する人間」をそれ以上分解できない行為者とみなしていることはすでに述べたとうりである。そのとき，媒介的手段としては道具と言語の二つがあることもみたとうりである。しかし，わ

たしがウエルチの著書を読んだかぎりでは，言語に媒介されて，言語とともに行為する人間は見いだすことができても，道具に媒介されて，道具とともに行為する人間のイメージは見いだすことができない。この点で，やはり，ウエルチの立場は，あるいはバフチンの立場と言い換えてもいいかもしれないが，尾関周二がかつて指摘したように，社会生活の全体的理解のためにはあまりに労働を軽視していると言われてもしかたがないであろう(14)。そのことから来る制約であろうか，ウエルチのブッシュ演説の分析にはある面での興味深さは感じながらも，この段階の分析にとどまっているかぎりでは，ウエルチの意図している疎外などという社会的問題を分析するには，いまひとつの不十分さを感じるのである。

ここで，少し視点をかえて，別の論点を提出してみよう。本論文の前半で，ヴィゴツキーの言う心理間機能から心理内機能への内面化および媒介ということを検討したなかで，言語と道具をともに記号と考えてもかまわないとも受け取れるような表現をなにげなく挿入しておいた。これは，最近ヴィゴツキーの書いたものを読んでいるなかで気が付いたのであるが，ヴィゴツキーにとっては，行為を媒介するものという次元で考えたときには，それが言語だろうが道具だろうが同じことであり，とにかく行為を媒介するものは記号なのだ。このように，道具と言語をともに記号という枠組みでくくってしまうと，「記号によって媒介された行為」が最小の分析単位になり，「記号とともに行為する人間」が最小の分析単位としての行為者になるのである。もっとも，そうなるとますます労働の意義を軽視し無視しているという批判にさらされるようになるけれども。しかし，もともとからして，ヴィゴツキー理論にはそのような目が含まれていることは事実である。また，バフチンの場合は，ヴィゴツキー以上にそういう可能性を大きく持っていることも明らかであろう。

しかし，わたしが最近抱いた，ヴィゴツキーは道具も記号とみなしているのではないかという観点，すなわち道具＝記号という観点は，別の文脈ではあるけれども他の論者も指摘している。尾関周二の紹介しているところによれば(15)，チャン・デュク・タオは，対象へ向った道具の働きそれ自身が対象指示の記号的機能をはたしていると考えていたようであるし(16)，小原秀雄も道具も意味を持ちうるし，その点で道具と記号は共通の部分をかなり持っていると述べている(17)ということである。

とにかく，いずれにしても，ウエルチは記号という観点から人間と社会という問題を解こうとしていることは，これまでわたしたちが見てきたことから明白である。

3　心的行為への歴史的，民俗学的アプローチ

さて，わたしは，ブダペスト滞在中に，以上見てきたようなヴィゴツキー・バフチン的なアプローチとは別の視点から個人と社会の問題を捉えているものとして，ハンガリー科学アカデミー心理学研究所のパタキとエルシュの社会的アイデンティティー研究，およびフランス・ストラスブールのマリー・ロレーヌ・プラデルの女性アイデンティティー研究を発見した。それらの詳しい紹介は既述の拙著においておこなっているので，ここでは彼らの研究が持つ意味，すなわち，わたしたちが本論文で言及してきた文脈上に彼らの研究を位置付けてみたときに，どういうことがいえるのかという点に重点を置いて論じてみたい。

(1)　パタキとエルシュの研究

パタキはハンガリー科学アカデミー心理学研究所の所長であり，かつ社会心理学部門の部長でも

あるが，彼の研究のなかからは，ハンガリー系ユダヤ人であるバラージュ・ベーラが，ハンガリー人とユダヤ人との間の葛藤を乗り超えて，いかにして安定したアイデンティティーを確立していったかという研究をとりあげよう[18]。

欧米社会において，ユダヤ人であることがその個人の思想形成に対して，われわれの想像を絶するような影響を与えることは，たとえばマルクスの場合を見ても明白である。巣山靖司が述べているところによれば，マルクスは自分の出自であるユダヤの特質であるとされる金銭欲とか金儲けのうまさというような，マルクスにとっておぞましい状態を資本主義社会のなかに見いだした。そして，自己自身の内部にあるユダヤ的特質から絶縁したいがために，資本主義社会解体の理論，すなわち『資本論』の研究をおこなわざるをえなかった。これほどまでに，マルクスの思想形成にとって，ユダヤ人であることは大きな意味をもったのである[19]。

さて，パタキはバラージュの日記を分析することによって，バラージュは結局のところ，ハンガリー人にもユダヤ人にもなりきれなかったこと，そして，最終的にはプロレタリア国際主義の立場に立つことによって，矛盾を解決したことを述べている。その間には，第一次世界大戦に参戦した経験とか，1918年に成立したハンガリー・ソビエト共和国へ貢献したこととかということも含まれている。

この，パタキの研究方法とでもいうものを取り出すとすれば，アイデンティティーの確立という心的行為を，実在した人物の日記を分析するということを通じて，歴史的事件とかかわらせながら明らかにしたということであろう。つまり，パタキにとっては，心と社会，心と歴史が，まさにストレートに結びついているのである。これは，ヴィゴツキーの場合の歴史的というのが，主として発生的ということを意味していて，パタキの歴史的という意味での歴史は，ヴィゴツキーでは副次的な位置しか占めていないことを考えるとき，両者の大きな違いになっている。

パタキと同じ研究所の人格心理学部門の部長をしているエルシュの，現代のハンガリー系ユダヤ人のアイデンティティーに関する研究[20]も，パタキの研究と同一線上にある。

エルシュは，現代心理学が社会科学的視点を欠いていることを嘆き，心理学が，歴史学や社会学，哲学との接点をまったく希薄にしていることを，致命的であると断言する[21]。そのエルシュが，ホロコースト後に生まれたハンガリー系ユダヤ人のアイデンティティーの形成を研究する方法は，彼自らが言うように，まさに社会学的である。

エルシュは，ハンガリー系ユダヤ人の青年を対象にして，インタビューをおこなった。インタビューの内容は大きく三つに分かれている。家族の歴史，主体の生活史，現在の意識である。その結果，次のようなことが明らかになった。第一に，ハンガリー系ユダヤ人の家族においては，自分たちの過去の歴史や伝統などが，親から子へと伝えられていないこと，そして，そのために，子どもはひとたび事実を知ると，極度の葛藤とアイデンティティーの危機に陥ることがわかった。第二に，ハンガリー系ユダヤ人青年がアイデンティティーを形成するときには，肯定的なタイプと否定的なタイプの二種類あるが，いずれにしても，歴史的に迫害されてきた集団に自分が属するという感情の基礎のうえに，自らのアイデンティティーを形成しているのである。

エルシュの場合は，ハンガリー現代史およびハンガリー現代社会とのかかわりで心的行為をとらえており，パタキの場合と方法論的に同一線上にあると考えられる。

(2) マリー・ロレーヌ・プラデルの研究

フランス・ストラスブールのルイ・パストゥール大学の臨床心理学研究者，プラデルの女性アイ

デンティティーの継承と確立に関する研究[22]は，詳しくは拙著に触れているけれども，従来の心理学研究には見られないユニークな視点を含んでいる。

彼女の研究のフィールドは，フランスとドイツとの国境の町，バッサン・ウイエ・ロレーヌである。バッサン・ウイエ・ロレーヌは，古くからの鉱山の町であり，ヨーロッパ各国や，近年ではアフリカからの移民の多い町である。そこに生活するある一家の三代の女性，祖母・母・娘が，いかにして自らのアイデンティティーを祖母や母から受け継ぎ，確立していったのかが研究テーマである。プラデルの丹念な聞き取り調査によれば，伝達・継承のルートは二つある。一つは，祖母から娘へのルートで，それはシンボルを通じておこなわれる。すなわち，祖母は孫娘に対して，しばしば過去の一家にまつわる出来事を話して聴かせる。もう一つは，母から娘に伝えられるもので，イメージを通しておこなわれる。娘は，母が一家の日常生活のさまざまの場面でどのようにふるまうかを常に見ている。以上のように，祖母および母から娘への，その家独自の文化的・伝統的な生活様式が，目と耳を通して世代から世代へと伝えられていくのである。言語と肉体を媒介として，行動の仕方，話し方などが，深層心理も含めて伝達されていくのである。その結果として，女性たちは男性とは異なる意味的世界，意味的宇宙構造を形成しうるのである。

このプラデルの研究は，わたしたちが今まで見てきた議論の文脈上で考えてみても，興味深い論点を提供してくれる。まず，シンボルを通じてのアイデンティティーの継承・確立の問題は，ヴィゴツキーの言う言語に媒介された心的行為の形成という問題と同じことをいっている。プラデルの場合は，それに加えて，イメージを通じてのアイデンティティーの継承・確立を提起している。おそらく，シンボルと対比させるかたちでイメージを持ち出してきたのは，言語には支配されない非言語的側面のルートを取り出したかったためと思われる。このイメージに媒介された心的行為の形成という考えは，ヴィゴツキーには存在しないのではなかろうか。ヴィゴツキーの視野には入ってこなかった男性と女性というような性にかかわる問題を，プラデルが扱いえたのも，このようなシンボルとイメージという分析視角を持ちえたためであろう。

4　おわりに

わたしたちは，本稿で，ヴィゴツキー，バフチン，ウエルチのいわばヴィゴツキー・バフチン学派の心への社会・文化的アプローチと，パタキ，エルシュ，プラデルの心への歴史的，民俗学的アプローチを，対比的に見てきた。冒頭にものべたように，もともと本稿の目的は，ウエルチの著書を読みながら，ウエルチの意図するところの，ヴィゴツキーを超えることが可能かどうかを検討するところにあった。

今まで述べてきたところから明らかなように，ウエルチも含めてのヴィゴツキー・バフチン学派とパタキ・エルシュ・プラデルらとの一番の違いは，心あるいは心的行為という場合のレベルの違いと，心と社会との結びつけかたの違いではないかと思われる。つまり，ウエルチたちにとっては，心というのは言語学的水準の問題である。そして，そのような個人の心と社会とが，道具と言語を媒介としながらいかに結びつけられていくのかが解明すべき問題であった。これに対して，パタキたちの場合はアイデンティティーの確立という，言語学的水準よりも一段階上の心的レベルを問題にしているのである。さらに，パタキとエルシュの場合は，言語とか道具とかの媒介無しに，個人の心と社会とが直接結びつけられる。ただ，プラデルの場合は，シンボルとイメージに媒介されて，個人の心と社会とが結びつけられている点で，ヴィゴツキーに近い。

このように考えてくると，ヴィゴツキーとバフチンは言語を中心とした記号（すでに触れたように，記号のなかに道具も含めて考えてもべつにかまわないようにも思う）を手がかりにしながら，心とか，心と社会との関連とかを緻密に探求してきたといえるであろう。その際，記号（道具も含む）による媒介という思想こそが，ウエルチも言うように，ヴィゴツキーにおける最大の，心理学に対する貢献ということになるのではなかろうか。この媒介という概念を欠くならば，個人の心と社会の関係を説明するメカニズムが，どうしても出てこないからである。パタキ以下の研究は，遺憾ながら，この点における十分な認識を欠いている。

さて，そろそろ，このあたりで，本稿の結論に入ろう。

ウエルチは，バフチンを介在させることによって，ヴィゴツキーを超えることができたか。否である。というよりもむしろ，ウエルチの意図するところの思想は，すでにヴィゴツキーの中に胚胎されていた。ただ，バフチンの社会的言語あるいは言語行為のジャンルという概念を取り入れることによって，個人と集団の関係，つまり，個人と個人の属する言語的共同体との関係を明らかにし，個人を集団の中に位置付けることができた。

ここまで述べてきて，わたしは，いまさらながら，ヴィゴツキー理論のパースペクティブの遠大さに改めて感嘆の念を抱かざるをえない。

しかし，最後に付け加えておけば，わたしがこのような考えに到達したのも，ウエルチの著書を読むという行為を通じてであり，ウエルチの推進している，思想的営みを通してである。また，現在の世界の心理学界を見たとき，ヴィゴツキー理論をもっとも精力的に展開させているのは，誰が見ても，やはりウエルチであろう。その意味で，本稿でわたしが述べた一つの試論は，ウエルチの批判をするとか，ケチをつけるとかということではなくて，あくまでもともにヴィゴツキー理論を発展させていきたいという共通の気持ちから出発しているものである。

文　献

(1) Wertsch,J.V. Voices of the mind : a sociocultural approach to mental action (in press)

(2) Wertsch,J.V. & Lee,B. The multiple levels of analysis in a theory of action. Human Development, 1984, 27, 193-196.

(3) Wertsch,J.V. La mediation semiotique de la vie mentale : L.S. Vygotski et M.M.Bakhtine, in B. Schneuwly et J.P.Bronckart, Vygotski aujourd'hui, Paris, Delachaux & Niestle, 1985

(4) Luria,A.R. L.S.Vygotsky and the problem of localization of functions. Neuropsychologia, 1965, 3, 387-392.

(5) ルリヤ　『人間の脳と心理過程』　松野豊(訳)金子書房，1976，67頁

(6) (4)の389頁

(7) ルリヤ　『認識の史的発達』　森岡修一(訳)明治図書，1976，241頁

(8) ヴィゴツキー　『精神発達の理論』　柴田義松(訳)明治図書，1970，210—212頁

(9) ルリヤ　『ルリヤ現代の心理学(下)』　天野清(訳)文一総合出版，1980，43—45頁

(10) Vygotsky,L.S. Mind in society, Harvard University Press, 1978, p.86.

(11) Wertsch,J.V. From social interaction to higher psychological processes : a clarification and application of Vygotsky's theory. Human Development, 1979, 22, 1-22.

(12) (8)の206頁

(13) Valsiner,J. Human development and culture : the social nature of personality and its study, Lexington Books, 1989.

(14) 尾関周二　『言語と人間』　大月書店，1983
(15) 尾関周二　『言語的コミュニケーションと労働の弁証法：現代社会と人間の理解のために』　大月書店，1989，108—109頁
(16) チャン・デュク・タオ　『言語と意識の起源』　花崎皋平(訳)岩波書店，1979
(17) 小原秀雄　『人(ヒト)に成る』　大月書店，1985
(18) Pataki,F. Identity models and identity construction, Paper presented at the General Meeting of the EAESP, Tilburg, Holland, 1984
(19) 巣山靖司　思想について考える，『日本の科学者』　1990，25/4，50頁
(20) Erös,F. After assimilation : Hungarian Jews today. Jewish Socialist, 1988
(21) Erös,F. Historical issues in contemporary Hungarian psychology. Proceedings of the 2nd meeting of CHEIRON, 1983
(22) Pradelles de Latour,M.-L. Le《sens》de la famille, Enfance, 1987, 1/2, 55-68.

(1990年 8 月31日受理)